中村俊定文庫
文庫 18
677

都筑蒟江戸廣小路の巻

[illegible]

次韵二百韻みなもと　栗[illegible]

[illegible]

行人[illegible]　此二句[illegible]　連句

起る賓や冬のはじめ　すみとりぬいなまた

数十丈の流れ見なる　[illegible]

[illegible]　春は積[illegible]

[illegible]　鶏[illegible]

[illegible]川　[illegible]集[illegible]

[illegible]　[illegible]

此言葉中すらかならし意味甚深よしにて
解しうる故安永のころ更師よ
是を聞まく小林東花坊素林其
外名家か此書希周集晩此書説をとも
世に出し事すあれとも是を見て
設解しかたへきよし日頃にして此冊
をおこなふらし色々と写して
ならしめ人々のためを新にかきとめ
てこゝみみし筆おさへしむ
寛政六寅仲春　東□庵

冬の日

笠は長途の雨にほころひ紙衣は泊りのあらしにもめたり侘つくしたる侘人我さへあはれにおほえける昔狂哥の才士此国にたとりし事を不図おもひ出て申侍る

○狂句こからしの身は竹斎に似たる哉　芭蕉

此句世に行し此紀行の名護屋にての巻の頭也狂句ハ貞享元年初冬の頃芭蕉に對し風乃身ハ紙衣なりとかくしてこからしの身にたとへて紙衣のつらを翁乃己ひとりかつけて

むかし山田に朱まき原作高物語のさまなる事
ありけるうるはしき門人あり又或説に有りける
説にたる説人とふ説くんそ説るを説人と
いへんや先ハ新古今撰四条道雄と云る狂歌
師に出ぬ山の白雪と詠たる説人をハ
名付れる説なるハ新古今撰の詞なれ共
なりてむかし山田に有ける物語を見ぬ世
をふる人のたふとき
てゝ新古今撰の中に三人有ること
考へ有り白風の歌ハ古の竹取物語ぬ
人うるゝ所なるいとう物語やうに有ること
きゝたまふ事なるまことに人ふる物語なり

なの花ともうつ原に門人有る此文字説
ゝ〜ハ書あやまりなり附会蕉風初の書手
此句ハ後白河院の御代に人丸の歌少
竹取物語に伝ふる入口のもらく
扁鵲も者婆も此物語ぬ竹取説ぬ物語て
此句ハ新古今撰に入ぬ竹取物
説ゝ〜ハ
道雄撰四乃文〜伝〜
宮ゝ〜ハ物語なる海のあハ冬皆ゝ撰四乃
たゝとゝ〜原の笠の系山花　野水
此説〜伝ハ此文やゝ疑ハ説ゝ〜

茶山花を活しなる風流人の行ひいとこうし
さつしなるによりてこのめたらきらひともいふ
花もし器の器あつかれたしとふなくさまもあり
たど通音ん消そやと○さしるかくどもて切ても
たしたる人ふとも切る文様そやとハ○知ることもて
切くもあへしくいつも有ることたやすかるなり

青竹のさかえ酒屋造らせて　符兮

さかえと言名にて青竹の名を字感涼しと曜
乃中に水曜星ハ暁昂星に据えし出る星なり
是流されかく深ふくてさかえ司でたかくも
の宮そ短冬に編ぐ白縁清酒茶の新ひ皆
さ水司に加へもて来酒より勧ることなるを
青竹の本名字なるつれ氏のてくれはるし
たる自作なる此酒屋を常に工乃作りたる
宗わる酒を竹の名を字とく久しき工の作りたる
多んされハ風流のことものも呼及ひ名酒を
好むなんと作まつり

かしこに此家を婦よ赤馬　童丘

赤字れうしら紙ふるひ穀物なと附ささ添
酒屋の名つけたさも好んし

朝鮮のほそうすきの白ひ紗き　杜國

酒屋の場をもうけんやる座場の附句をして
新雑下ゝきの句はそうそうはいかゝる稲を
特ゝゝ文のそのゝゝふ吟れるゝ所ゝゝゝ
れかゝゝゝかるゝたゝゝ宝蓋と思ふる也

日乃ゝ句ゝ雑ゝ冊ゝ第ゝ代刑　正平

第代刑ゝゝゝゝ八変して新雑ふ附ゝゝゝゝ
仮ありたゝゝゝゝたゝゝかく実ゝ入ゝゝ八宮平
第ゝを刑ゝゝゝゝのゝゝゝゝ百性のゝ句
ゝゝゝふ流ゝゝゝゝゝ新雑ゝゝを稲ゝを第を
ゝゝんや入第代刑ゝゝゝゝゝゝ和い和通
音ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝふ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

紙ゝゝゝ響ふ宿ゝゝゝゝゝゝゝゝ　野水

稲刑ゝゝゝゝゝ響紙表乃下ゝゝゝ表
日ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

繋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　芭蕉

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

業平新古社繁城切くろう業平繁とちや
さしとこもり居るうらはよことよせ一枕
うんと吾妻のうれしかりかとて山ゝる無名
物ゝうと又出白城法れの居行の人の繁ゝや
と還俗のうとうもうつと

ゝうゝ社雅雨しと気城ちゆうて　重五

おの白尼の還俗とうゝうゝ常もうとめれ
ハ思ふも思ふれぬさるう還俗なと蕉風
ふ伝ゝうゝうゝふ人伝ゝうゝうゝなん義の
ふみ流俗城ゝうゝ井りふゝうゝ社
のうゝ城ゝうゝとのを　張りやうゝ

法ゝれ辛崎繁ゝ　荷兮

気城ゝうゝ物ゝうゝ法ゝ
ふゝ出のゝうゝ幼ゝうゝ城ゝ
社墓ゝうゝ行ゝうゝ

岡雨乃ゝうゝ乃ゝ宮ゝ出城繁ゝ　芭蕉

眼を法ゝ出ゝやゝ墓ゝうゝ
ゝゝ墓雨の道社法ゝ社衆人物壊ゝ火
城焚ゝ物物乃曲ゝうゝ雪ゝ烟ゝ新のゝうゝ
ゝうゝハ貧ふゝ虚　家　杜國

[illegible]

[illegible]

田中なる小さんの柳ゑるころ　行弓

[illegible]田中[illegible]柳ゑるころ[illegible]林小さん
う柳[illegible]の[illegible]

[illegible]引人ちんちう　野れ

柳ゑる[illegible]
[illegible]引人ちん
[illegible]

たゝ[illegible]柳ゑる自邸　杜國

[illegible]引なる[illegible]
[illegible]

[illegible]　重五

[illegible]の自[illegible]
[illegible]町の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

二乃[illegible]

野水

[illegible]

蝶ちる蘆ちらちらと鼻かむ　芭蕉

[illegible]

素物や蘆すく紙漉　重五

素物の[illegible]

今を恨の手紙[illegible]　荷兮

[illegible]

盥人乃就会の松[illegible]　芭蕉

ち代経ても許さぬ熊坂が物見の松の名こそ残れ
たるハ古作なれ歌詞乃ミ聞て乃雅也
余情を見せ侍らんの為に千ゞと短き空より物見の
松の趣向も此句ハ粉骨なり

志ましし宗祇か名残つきし水　杜国

宗祇乃清水ハ近江の醒か井雅流の高低
にて先是流れ又江熊坂と宗祇松と清水
と對するなり醒か井実ハ清水八宮寺より
二三丁西へ引く道より少し入て当時ハ小家
と云ふ名物にて侍れハ甚だ宗祇の頌ハ醒
か井の流乃末とこそ侍る

笠ぬぎて無理にも濡れん小時雨　荷兮

是ハ其比翁笠ぬぎてはらくも濡れ
給ふと記しあるを今もなほ侍りし小時雨の
宿りにて宗祇も又るもゆかし宗祇の句の
うつゝ芭蕉か深川流や井筒にもありし紙　宗
祇を作りて笠ぬきてふく文字を書そへしを
語りけるありさまに寸紙一軸今洛の芦錐家珍重す

冬枯わけてひとり唐苣　野水

けふも冬の冬枯乃黒き色苣のうすみどりと
見て侍る趣きにも八首紙にしたゝめ一見孤雲

獨去る此歎ハまさに其場也

きさらぎや碑しらぬ人の昔ゟ何　杜国

昔の香を此碑に追とえ入て昔の事を
討よりきてしへきく此に色なる此侍るへかなり

烏賊も坤艮国乃ゝかゝて　重五

昔ゟ何とらふ紫燈にけるらや人の骨とる
何ゝす烏賊乃甲なる亀卜ハ周易に用る
非代文康の骨坂用ひし事も都の事なるに
烏賊の骨もやさしきと此ある句なり

何ゝ彼乃此徒もこゝし郭公　野水

烏賊も実子乃ゝきさゝいかゝきんとて
徒なるへしと是又きとえくる何りて貞
享比にをかしる所ゝ紀事に見えし哀さの
子を実ハかの名常に此をゝ入きまなり

稲れ一斗漏と手長さ　芭蕉

其徒のこゝかなる夜ハ漏刻も漏りなくなりとさん

日
東乃李白か坊に月を見て　重五

稲れ一斗を以てより李白を訪ひしなる也

石川丈山詩日東の事白氏に称せらるる已
丈山詩を作る人うらやむ詩を解作詩日本
の事白なりしたるもの多くなるべし

中秋月

開元遺事曰汝陽王進嘗載呼硝帽打曲上自摘紅
槿簪置帽上遊滑久而方安曲終花不墮嘆曰花奴
日来の事白と云ふ

半月

琵琶妓女人の家に半月伝城弟子白伝城
仲中秋に今若の時に城弟子歌を
家のいのちはと云ふ今もとれと今と云へ

芭蕉

無月

無月の夕べ雨降りて月見ざるを
歌とす城中人多く出て歌を
の中に出て歌を詠ず

荷兮

我いのちは月見ぬ日の
とせしらのうとて
子伝ひ新人と云ふ人の神前に歌を持て
満を乞ふ夜の霊夢に明方に月見て拾句

杜國

ゝ入しこゝろし奇妙なる作なるへし前句の静なるを
鏽といふ字を室の八嶋の縁語として此
句は人を焼句にかへりけるなり尤子のからう
は見城やまさくいさむきかしこまりそのまより下
を録と云へきなれ共まりて見れはむかしやし梅
又はりたるこゝのしるれつるし焼らん情の穏

けふハ妹乃眉かきに行　野水

漢張敞眉を画てやさし故事なり

綾ひとへ居湯に志賀の花漉て　杜国

眉かくとてより合する用をしらしめたるなるへし

る作る志賀紙と云水紙居湯の名水汲つく謂
まる花を漉の字にうけなしとて擱ける
さ故なり居湯の清水全精なりん

廊下は藤のかけつたふ也　重五

湯殿つゝきの廊下藤のかけもくもりほゝ
京邑見てゝし氣にいふ事をほてなり

、其二

おもへとも壮年いまたころもを振はす　杜子美か老
大非傷未拂衣と云る詩の意味を含めたる也

○初雪のことしも袴きてかへる　野水

茶にはさし候也空也中の勅使道人とか申人
ことにさし杜牟也逢てくたるは行くに夏は時鳥
秋は月をみてさびしげにおもひしれり高記
ありしも物さびしく作なり
澤庵和尚の語に いとへんかなしみ室乃
すみかは紙なりしといへるものをさうられ
ほかは此ときもかなしみ侍らんを

ものすり侍りてあはれあさがほの会　杜國

登るのさかり絶てけて対ひする宮さ留長今日を
知るといふめる來て此字感涙とほろゝ人をまつ

そもそも此は清の阮籍が総林良材と又
いふ文字をもてかきつらねたる六古蓮てふ書
をみしにさながら文字のさびしかりしにや
其上に無常をふれなへつくさとしも蔵
其中のすさみけて物あるとてふ行つきむかし
山の行くもと衣合伝ゝのわかく時のつたふる
さる紙記おのかるえ部のあわれの身を含とほ
流れにはほれける貞享丸雅也

此篇またたうめる蝶の羽おもて　芭蕉

家の部のあはれよるかへる蝶の羽おも
て家やうてれ発のあるなる字九龍といのち

こゝろ侍るゝ雨まことに微妙なり此事に
きゝ通ひて秋季に移りたらん事近ごろ
言出て篤き冬やなりなん時節まで
あまる姪のまた紅わきまてとつけるなり

鶏をけふも車にふむ雪　荷兮

唐菓子の出すに鶏ハ常にとなろる車にのし
て鳴やむべしと与へたるらんてあらば嘆てとゝの
郊に四句め八句めこそより考らんするなるにして
てまごふのはしまとんの支るゝ足留れもしてなさん

唐土の身細に鶏婁鼓を鳴らすらん　重五

仲麿ハ霊亀二年入唐上元二年に皇朝ゆるしし
明州の津より出て天の原ふりさけみれば
三笠の山に出し月かもとよめり日本の鬼郷辭
帝都とゝらまゝ李白ら詩あり甚ちうの詩人侍し
て鶏婁鼓を寺にすゝめしたるへしと侍るなり

桃花紙にわる貞徳の留　正平

麿といふより貞徳と云ひ移りしなと貞徳は松永
弾正の孫にて連歌を長けし九條玖山公に奥義
傳られて家の本なり自長頭麿と号し隠者なり
ら写貴まて洛ふれも園の茶荘をとなり　梅園

桃園芍薬園牡丹園などゆかりの地名は桃園の名なるべし

面影や畳の上の田螺とる　杜國

芦の若芽の泉に沸るまで田螺ほしがる鳥の声

花なくて蕊ばかりの桜かな　野水

白川の関はいかに秋風ぞ　芳分

奥のまゆ作るゆふべの蛍かな　野水

四つ手の網代に白魚の目の光り　芳分

みちのくの名所見せばや桜狩　芳分

春もすでに行くえ定まらぬ旅人なれば男　芳分

奥のまゆ作るゆふべの蛍かな

又出て田舎客乃さそふなるべし　芭蕉

また逢ふ日を思ふ人の涙かな

そなたなれ歌ひ給へ八月の行燈の中に

すやすやと人の寝ぬ夜の月

さらば余情深く句なりしかるべし

白魚やとりしめ縄の紙屋時雨　芳分

なほ紙屋時雨の長行の

句なりしかるべし

縁

さまざまの乃根　芭蕉

従男同士とかたらひ幼なけれども名つけ仲なり

しるし女のうらはかとなれ或は新貧に通ひ寄

もし縁好となるべし若の情さもいかん

シイ子
シビキ
フスベ
コブ

ゐ井戸や疫病ちらすかなし　野水

縁さらなる石ぶみ苔むす桜陰の年深そるれ
多乃うへこそ入くゝ流ゝ向ひ系もと面の中此
病を打恨こちらうんとまてに縁をたを
悔歌ゝ余情なるん

望日も歌ゝ一首出くらせん　重五

ゐ井戸とゝふれとうの歌の首は病こそ出て皆
れゝ狂ふふ書子と拾各ゝ足ものとたく
ちゝとゝ七君を霊へ向の狂打擲ゝ
望も歌乃由縁へ送らんとゝふ俳なるん

小こ出ゝ童ゝ首ゝ出ゝ出ゝ　芭蕉

歌ゝ首送ゝんとゝふ凱陣の歌向ま中太功
の武ゝ出ゝ小こ出ゝ大将の傍出ゝ
武者大盃ゝ着ゝ俳姿情ゝ

月も逝ゝう花ゝ牡丹ゝ人　杜国

名花の牡丹日ゝ出ゝ人の行
を待ゝ今宵ゝ出ゝ緒乱奏乃大酒宴此
ゝ月逝ゝ出ゝ

蹴鞠細乃ゝ出ゝ破壁落て　重五

鞠場は色牡丹の咲て居人の家よりかゝ
る破壁ニと作りて余情かぎりなく侍るにや

ちりしくの地處こそ京町　荷兮

鞠のかゝりは大寺は門前町石工の鼓向地處
きるる作余情深し

さり每は世とや要のつきぬらし　杜國

名比處より嫁を迎ろひて斬條のんとね
て人の身はそれをまた記しりん鳴呼記
のそまて新色の新は新ひ衣被を餘りなる
先う羊を要すとも其は末は皆此ごとく此處を
なるよのもとき鈴の香執多は白骨を記ある
もる余情に感深し

禿

禿いくつ乃春やかんゆる　野水

嫁を見る身それは人にくらへて写る人の
子ハ年比とそ嫁とるそ人ゆかし添の名を
記るに不て夢しまたる禿ハ娶春乃名男
乃ころまいやそらんと懐なるらん

櫛

箱よ餘す申る室不のこの形る　荷兮

禿を入し低楪の記餘室や化粧部屋う
飾るなるべし足崔門弟申季は御ハ此句をと

城よりとすんぶとものう

雪記と紙燭とかまくらすと　芭蕉

紙を四角にしてうら書れ後句をえらび作る

篠垣く枯ハ撫乃夢中さまし　野水

雪つもるさく帝の比とえる真栖那八篠

垣くるの撫ハ雪うらうらとけさ枝さ枝を

さるみ枯の糸色なり

三味線かしん不破の関人　童五

篠垣をかすかうかがふ不破の関人色

白紙を旅の艶書の切よりさ行く偽うれ

紙と関人と三味せんまさんと人うなる人

世遠ゐと三味せんの枯さけるる余情えんう

道すがら美濃さうらかるる碁と高　芭蕉

三味せん琵琶法師伊勢ゐ郡なと

えもいさ歩り多うう碁さの白雲を郡

古く紙鳶の名あり又碁とよく打しこ

まりと生一さうるる人うう

森さんくれ　ひくくも　七十　杜國

是さ先人のうえ宿うつのなる

碁に七ずけなつて忘られし年ハ嵜
きしれもの々七十古く生きてハ行とも
おそるゝとき家老城井ゝる情なる人し

奉加名詩堂にこそ手おさひ　重五
老人乃精よんで門跡の奉加乃額向学語
頭とんで寄を今の句作え出ること し

笈とりの笠の下よりまされ　荷兮
奉加金銀の大勢ゆるき御ゝ大名様々上
傘の数をとらしお傘にこそうきれるより

蓮池に鷺姓子哉　杜國
傘さし来る道の真蓮池の鷺姓子ゝ反紙
ひひ蓮の庭広島陸下にこそる姿お傘のなうら
に似かしひとあそを場さも似るへし

牖よりつゝゝゝすゝ中ゝ紙海　野水
池紙寄に探ゝとつゝ紙すく書家に余情風
流ぶゝうし次

月干さゝゝ源氏庵物語に堅の紫か花　荷兮
庵人とうさて廣物の古きかるゝ紙月手

親はなき尊き髪剃の僧をまつり哀し

ゐせの母臨済城清川　芭蕉

髪剃れぬこそ有がたき臨済禅師の母こそ知る[illegible]漢土の[illegible]して[illegible]やし子[illegible]機を識[illegible]親の母[illegible]恩[illegible]逢ひて眼も泣[illegible]人[illegible]

江湖風月抄大義渡之頌

濯足機先被熱瞞　黄金之義鐵心肝

千成報徳酬恩句　萬古一江風月寒

註曰

黄檗運禅師得道後、忽思省侍父母。師任到閩中、一婆子出問何處来。師云江西。婆云我家亦有一子在江西多年不歸。師因借宿。婆親為洗足。運足心一誌甚大。婆失記是其子。次日運辭去。於三里外説與郷人云吾母不識山僧。但母一見足矣。郷人報知其母。母走至福清渡。運已發舟。一跌而終。

[illegible]人あり黄檗と臨済との[illegible]臨済[illegible]孝子[illegible]女も禅眼[illegible]臨済[illegible]

礼[illegible]

秋蝉[illegible]　野水

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

作りそへ

蕎麦の葉に紙細物人の文に添て　野れ

紙細物人の勅撰なれば蕎麦にかくれ
に入るる葉なるべし

小紙帖門に井の水　芭蕉

勅撰なれば出る物人とて唐門をはかる

馬糞かく扇子　宗牛

つかれる糞に紙形に作りてうたへるなる
風にうつる吹きうかれるかとむなり

宗牛湯あり　むかしの名月　正平

る糞より思ひ入るる紙箱英紙句に宗牛の
情なるべし

うるはしき宗牛の讃歌かつて　宣五

宗の湯師かつて始めの讃とは利休乃娘
の侍なるべしかるべしこれを学ぶ家は
つ〳〵け良猛是はせこそうる又鶴大是は憂嵐
紙四とてうるべし家とは箱大なるべし

蛙蓋市にて情　くるるる　杜國

二人の男に思ひ寄られ女はいづれを取るべきかと
こまりぬるなり上代は絹木の数と思ふ女の門
に燈籠紙捻しをかけ竹林良枝こゝろ大和方
かつらこゝろ此後もわるし

寒さ秋は角力ちからくらべ　芭蕉

はるばるとこゝろ紙をとゝのへこゝろ
載せる白髪ゆゑ寒さとゝのへこゝろ
この句はこゝろ寒さかうきこゝろ
寒のうちとあらなこゝろ寒のこゝろ
もつてはこゝろ
板拾遠　秋ゆゑ

ひとりのこゝろ

芋焼　芋焼　芋焼　野れ

寒の明所をもつて寒れ坊の屋敷
新こゝろ寒さこゝろ
新月夜雙こゝろ

新こゝろ

新こゝろ　社國

新鶏冠買ひ　荷兮

新鶏の明方はこゝろ時をもつて鳴くこゝろ
刈入田穂の高中なり農家は昼夜つとめ

[illegible]

悪しふる紙業として離れ紙屋　野水

学紙屋くれなゐ紙の粉紙悪法人
のこもり屋くれなゐ紙の餅紙遠ひけるうへ

命婦　乃君ちりぬるなんとうて　重五

法人のちりぬるを中縁の命婦ちり時雨の
ものなとえ法ちりぬるて

[illegible]

法ちりぬるて律法のちり岸中ぶく　岸雪
宋のおちり物紙律法の仏のえ養なく
るえ人ゝ仏て律法地蔵雷紙名作ゝ仏ちえ

佛　冷ちりぬる　奥　ちりぬる　利　芭蕉

讃州志度の浦長田社作平惠空上人の勧化
一心念仏の行者ちり或時志度社海律法を
法ちり歩ちる鈍乃彼ちり惠心の作社孫泥
佛を得ちりぬるて

縣　常法　奥　え　沢　部と仰られく　重五

奥の猿とうかれ紙屋さんと名を設るなり
なか中〻稀なる花うせて名を設るなり
なるなるなるなり

又 飛すみれを乃留 又 杜国

なるさとなる百姓のうへとうえ持て出田
畑の中に立ちのふ蓮もあり二反八畝
うれ〻なる〻〻鳴る雲雀 芭蕉
又 飛蓮のはなる〻雲畑〻ちなり〻雲雀
の時なるなるん

去程に行るの行ふ程に新ちり 野水
こと花のうちあるて咲ハのんうと咲
歩りなるうも眠を附るうへ

宗時や矢刻の移り乃もれるふ 杜国

うふ〻〻矢刻の移紙にうるもにく〻
ふも行うなる〻移とのもふ〻紙紙屋乃
なうに梅もやうと思ふさまも平白に我以
やもうとも短白にても一度一白ハうとうなる
長白に紙ハ黄白に我と差別なるふ屋を
うなるうなるみる行うるもの消なり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

詩歌連俳の句も[illegible]

[illegible]ハ栄州[illegible]伸[illegible]　野水

[illegible]

[illegible]

晦日　[illegible]　重五

[illegible]

雪[illegible]　荷兮

[illegible]

惠宗之詩に

笠　重　呉天雪　嵩　軽　楚　地花

襟をうるほす袖は解く　芭蕉

その置塵は遠くとつくに向く其宗家は不
好名国遊里乃繁華を極むる尾の細道
襟をうるほして不仏国をうるほす

化人と打ち捨て御ひとむ　重五

うるほす袖を襟をうるほすとうるほすの字
なれば共に悪人と絶死を死るんと云ふ
の情は外にしるるう

某嚢の元とくを名をとはず禅　杜国

名を名情を懲らす袖禅法をうるほす遊の
うるほすなるん一休禅師の成なるう
うるほす鼓をうるほす芋を一梅海く
本来のうるほすうるほす元をうるほす
うるほすうるほすうるほすうるほすうるほす
法のうるほすうるほすうるほすうるほす宗徳

三日月乃朱をうるほす鐘の夢　芭蕉

和とくの寺に禅乃宗なるたそうるほすは
三日月をうるほす夢乃宗なるたそうるほす

秋湖かとうるほす琴うへとうるほす　野水

西ふかう三日月ばかり東に吸殻を投げ湖
上の漁舟篝火ちらちらとまたたきつゝ

[illegible]を敬する　杜國

[illegible]

夢ときを仏座婦ばかりする　荷兮

遠のく佛れ寺ほのかに自ら[illegible]

[illegible]

新うたよりの燈寄に記憶く　野水

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]れたるの日紙衣もれ[illegible]　苔蓬

西上人を殺されし涅槃の日紙衣もれ除終る[illegible]
深[illegible]れ[illegible]も人を[illegible]皆と[illegible]

一真四

なんは清[illegible]たく[illegible]すけ[illegible]

○炭売乃れの[illegible]妻[illegible]　重五

おさい万[illegible]人麿の[illegible]れ　紙屋人
[illegible]
[illegible]れの[illegible]妻
童[illegible]
紙[illegible]

人の化粧[illegible]紙かく麿　[illegible]　[illegible]分

[illegible]れ妻に続を白[illegible]
炭売[illegible]麿の[illegible]て職人[illegible]会の[illegible]
[illegible]
[illegible]
職人歌合七十一番持
左番直の月
[illegible]
月[illegible]

右鍛冶の用

[illegible]

又和連歌

[illegible]　英一蝶

[illegible]　其角

是も歌合の[illegible]

[illegible]　杜國

人のけしきとりて[illegible]

[illegible]

[illegible]　野[illegible]

霍[illegible]

荊[illegible]

風吹ぬ秋の日[illegible]　芭蕉

[illegible]

[illegible]陶淵明或九月九日無酒菊ノ下ニ徒然トメ有ケルニ王弘ト云人酒ヲ贈ケル

トフ朗詠ニ王弘使立晩花前落々ニ霜鶴渉

鴉皆可愛野待[illegible]

又秋織[illegible]　羽笠

市人風流の茅巻に成言はんとせし中と
言葉書りなるべしなるべし森の宮ふるて絶まる
望をて行望羽望なるの数なるべ　ふるい
賀茂川や胡麻の代祭やをと　二行分
義望城の麻の代系の他を物とえ望ふる海
ふるん賀茂の宗社と胡麻の代稲荷行をを成ふ
年りく四年代の麻を神方に納く社の麻城
望ふる系なるとそ
宗ふる社智なるりの比　重五
宗ふる八幡ふる所に於成ふ宗ふ
俗外ふる是始の情をを宗ふ智年代ふ
ふるふる伝もなるるふ結ふまふ
思人ふを布摘ふるれけるはまふ　野水
なりりは望俗ふ系ふ成ふ風ふ宗ふ
ふ宗ふ二十七代ふ中ふ　杜國
けふ鉞ふ張を成弼代ふの花かをえ入
他ふ百俵ふ屋ふん三平二満ふふふ
ふふふ社ふふ行ふ祭代ふ系　羽望
人情の思ふ俗ふふ祭代嫡ふ成ふて競ふ海ふん

[illegible]れうれ炬燵 [illegible]人[illegible]ん　芭蕉

[illegible]て炬燵[illegible]卧[illegible]
[illegible]

門[illegible]　重五

[illegible]
[illegible]

血刀かく[illegible]　荷兮

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元くさはらくさに懸とてとりあり　芭蕉

紬屋より猶乃元祐元年くさに去の元
を記恵しかる所なん智識の佛法
も懸いとうとうとうとうとうとう
もくくく

白燕如行雪流水なれば浮乃比と栖まの
なへてこゝろのふかひなれのはなれなるべし
ものゝまもるもん

本草曰人見白燕生貴女故白燕名天女

宣旨賢く釵鑄保重五

洞冥記曰元鼎年起昭靈閣有神女留一
玉釵與帝々以賜趙婕妤至昭帝元鳳中
宮人猶見此釵共謀欲碎之明旦視之亟
唯見白燕直升天去故宮人作玉釵因改
名玉燕釵言其吉祥

八十賀に之れるる童母持く　野宰

天子乃釵を綺ゝつゝ初冠御即位の賀と
ゝ入諸国ゝ長壽の人を撰ゝ敬ひ老業
ゝなれ伴又其ゝ人のもゝ賀れ人も余情ゝ侍ん

中ゝ多ゝ初れゝ敬ふゝれつゝ　杜國

芳河老業ゝ八十されこつゝゝ孝行ふ織女の
ふ孝とゝて遠ゝ行ふん織女六天帝れ姫ん行西乃
森ゝ要ゝ織ゝ織ゝ又母ゝ疎ゝ
ゝ八天帝ゝ中と避て天の川と渡て七月吉
一夜逢ゝ成ゝ中と彩ゝゆゝるゝん人或

[illegible]

[illegible]

[illegible]

栗ばかり用ひて出でて六月の時分四月後
作る余情なりとぞ

行くとしもしれず年慶乃宮　野水

寅社は乃旦紙紙はたとゝ記く　芭蕉

南京乃地　羽笠

南京乃地紙はかの紙仙を行者化を
なくなりなりやそれはよりて紙なるべし

囲籬して行くもちゐ人の像　荷兮

ふるの所ゝ僅ゝ形として田畑乃中に囲籬
て在芝ハ大ゝ周秀者ハ比御金者大和大酒会
厩の像なる紙今ハ所の農夫ともちやちゝ
ふまとて行くもちゐ行くるん

流れ寄る芦の根　重五

[illegible]

粥すすれば暁　花すかつ　野水

[illegible]

待宵の下に　燈ともす　芭蕉

陣中は粥よりも大将待宵出立の下ごしらへ
徘徊の句乃輝忠を妙作なり

小の方なくなく屠り　羽笠

[illegible]

森々と[illegible]　杜國

[illegible]

甚五

田家の眺望

○雲[illegible]の行くを亜[illegible]　行兮

前文ふるに弱なく咲田舎の徐〻として白れ
なるハ高れし田面の稲の穂のそよぐ
かなくるまくるまくるまの音涼し

そよ風ハのうしろ吹るゝ柴　芭蕉

蚊帳行もなくて夜白れ京帳新月と
そくく画こうるゝ京見物ちら
宴や山猟そそ昼の男なるこゝ須磨

柳擔亭家の作紙木れ京帳　重五

ぬれ新日紙屋ふれ曜〻夜白れとを隠
るるゝん作の白眼ゝる紙身之笛芦涼

ゝ紙作ゝ感味をゝぶゝるの色

ふふ丁る牛の垣ゝ丁ゝ　杜國

ふふれ垣不自由ゝ海辺ゝゝ牛屋姫
るゝ〻ゝていなゝ行經てかゝるゝて小
宮ゝ作ゝ絶階乃て留ゝ一の格ちら

青もなれ具ゝれ月のうすゝ　羽笠

ゝゝ八陣屋の新垣ゝゝ音ゝ絶ゝて武
具も兵師ゝなる牛ゝゝ甲斐れ軍場れ後ゝ

酌ゝ涼ゝゝ八宗切ゝ　野水

血祭乃酒宴と数句成宝大将佐舟の童
仰の忠活んとする句徒書ハ紀氏情ハ
扶乃比筋の清連歌いと仮千　芭蕉
雲上の音とん雲筋の清連歌席上此活氏と乃長
御晴く富士　とん　車　李　荷兮
宮氏清上活清尚氏拾ハ富士氏活乃清連歌
寄ハて椿の花比氏る　音　杜國
寺比氏の枝ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ眼おるり
茶千いと拾ハと清る風の色　車五
茶毛比茶氏清ハて氏ハて氏ハて氏ハて氏ハ
ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ
雉子追ふ烏帽子比女五　三千　野水
茶毛比茶氏ハ烏帽子比拾ハ入て氏仲比拾
拾ハ巴山吹比烏帽子氏ハ氏ハ氏ハ酒奥の俳ハ
庵ハ木曽作氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ
是ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ
或ハ木曽路の茶毛氏清庵ハ氏ハ氏ハ氏ハ
数句なハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ
茶清なり

庵ハ木曽作氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ　羽笠
是ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ
或ハ木曽路の茶毛氏清庵ハ氏ハ氏ハ氏ハ
数句なハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ
茶清なり

[illegible]山橋手[illegible]ん　荷兮

[illegible]の待を[illegible]橋の[illegible]

[illegible]

麻刈とて人多き乃集なむ　芭蕉

麻刈とて人多き書てあり[illegible]橋手

[illegible]風流の志より集なむ用を

[illegible]芦刈麻刈なと人多き集乃

標[illegible]も知人よ[illegible]へ[illegible]

[illegible]を近く猶[illegible]菴と[illegible]て　重五

[illegible]

紙月出て　月はおぼろ[illegible]　杜國

[illegible]唯一筋に[illegible]法或は阿字

[illegible]心の月[illegible]照

[illegible]

旅衣留子[illegible]紙歩[illegible]　羽笠

[illegible]人の鄙の[illegible]留[illegible]紙[illegible]

[illegible]悔ある[illegible]

[illegible]輿ゆ[illegible]木[illegible]の山[illegible]　野水

[illegible]

[illegible]

[illegible]

萱家はまことに家を忘れぬ　白　羽笠

切株つゝけるさかりの場紙を入るゝ田家は勿論
けせ市中は場所なるゆゑ段義はもとよりなり

家囊尼の小坊主にもらひ給ふ　荷兮

女のまれ坊主なるものを中にふゝ髪をとる
けしあるとこゝろ小坊主はいとなりうらの交接
ゝんやれあるとこゝろ鈴をたゝあること
ゝ場にておのれ丹ゝ入ゝうゝ坊主
ゝゝゝ

狐ちゝ亦代庁屋と云へく杖の末宮事孫と
供物祝刷く串柿或ら小縄と祝く干場とも
つゝしゝ亦根ゝ祝く干竿

亘廣 庁くゝて母比喪年入 野水

庁屋の亦祝喪亦ゝ多ゝ喪亦古代八
強ゝ云ゝ格く庁屋ゝ遠ゝものゝ大和の亦と
亦上代の遠風ゝ何なる貧亦ゝ也ゝ有
強祝作ゝて喪中箕屋なる喪中乃食物
亘廣作ゝ宜ゝ亦ゝ

え故のゝれ待しやをゆくゝ 芭蕉

母の喪手入亦ゝ祝除ゝ代ゝ故ゝ云ゝ宜
故の法ゆゝ亦母子孝行なるゝ人ゝ母と作
多延ゝ作ゝ純ゝ祝待強ゝ笑ゝ風俗顔
少ゝ法華一流の除ゝ物八源逸傳ゝ亦

仏見木幡寺鐘 京祝うつ 荷兮

え故の月亦ゝ故ゝ云ゝ風俗ゝ作ゝ木幡
の堅待手亦の亦ゝ山ゝ作ゝ木幡
祝うゝ作ゝ亦ゝ亦ゝ
古今

ムゝ今ゝ亦の中ゝ祝まゝ云ゝ
うゝしゝのゝ山ゝ亦ゝ亦ゝ

[illegible]男猫[illegible]を抱くと　杜岡

[illegible]乃猫とみりんとを[illegible]婦人の抱く[illegible]

夢[illegible]の雪掃くよ　重五

猫抱く時[illegible]

所の命婦の仕丁[illegible]

れ干[illegible]やう年　野水

雪掃く鞠[illegible]

[illegible]の[illegible]

山[illegible]

是[illegible]

追加

いつ[illegible]　羽笠

象[illegible]牛[illegible]象　羽笠

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　荷兮

出船牛馬の賃銭奥州会津なとより
塩油酒の類銭京國へ駄出て一連に運
て行はそれ七年に当て数る所と宿る此家と
年匠八後の篠家に芝なりしかはなりしかはなりしかはな

花洛書肆

村上勘兵衛
井筒屋庄兵衛
橘屋治兵衛
大和屋吉兵衛

俊定蔵

淺川鈴木藏書